

アノミー論における〈欲望〉の問題

山岸俊男

現在、アノミー論には、大きく分けて二つの理論的な立場が存在していると考えられるであろう。いわゆる「マール・マン論」的な立場に立つものと、欲望—規範の関係を中心に置いているものとの二つである。このうちの前者はデ・グレーシア(1943)に代表されており、後者はマートン(1936)に代表されていると考えられる。またこの両者は、デュルケム(1897)におけるエゴイスムとアノミーにまで遡ることができ、それぞれ前者はエゴイスムに、後者はアノミーに対応していると考えられる。すなわち、デュルケムがエゴイスムとして描いていたものは、他人または集団や社会から切り離されているという感情であり、これはデ・グレーシアが分離不安から説明している(彼の)アノミーの心理的側面とほぼ一致している。他方、デュルケムがアノミーの心理的帰結として描いていたものは主として欲求不満の状態であり、これはマートンの場合とほぼ一致している。本ノートにおける筆者の関心は(デ・グレーシアに代表されるような)前者の立場に立つアノミー論とはズレており、それゆえ本ノートでは、後者の

(すなわちデュルケム→マートンの線上に位置する)アノミー論のみが取扱われているという点を、最初に断っておきたいと思う。

I デュルケム(1897)は、社会的諸規範の力が弱まり、人々の欲望に対する抑えが利かなくなっている状態をアノミー状態と呼んでいた。ここで彼の議論を詳しく説明している余裕はないので、以下の議論との関係上押えておくべき、次の三点の指摘のみを行なっておく。すなわち、(1)デュルケムのアノミー論においては、〈欲望〉が中心的な位置を占めていた——アノミーとは「欲望の沸騰状態」であると定義することすら可能であると思われる——という点、そして(2)その欲望は、動物的なものとは区別される、すぐれて人間的な欲望として捉えられていたという点、そして最後に、(3)その人間的な欲望は、今から述べるマートンなどの場合と較べれば、かなり幅の広いものとして考えられていた——たとえば性的な欲望なども含まれていた——という点、以上の三点である。

次に、マートンの場合を考えてみたいと思う。マートンは、デュルケムが欲望および規範として捉えていたものを、それぞれ〈文化的目標〉および〈制度的手段〉という形に置き換え、その両者の関係を逆転させたと言うことができる。すなわち、マートンは、制度的手段に従って達成しうる限界を越えて文化的目標が強調される時、そこに規範の弱まり(IIアノミー)が生ずるとしているのである。ここでもこれ以上詳しく説明して

いる余裕がないので、次の点を指摘するにとどめておく。すなわち、デュルケムに関して既に指摘しておいたように、マートンの〈文化的目標〉は、デュルケムの〈人間的欲望〉に較べた場合、著しくその範囲が限定されたものとなっているという点である。マートン (1946) が文化的目標の例としてあげているのは〈成功〉——特に金銭的成功——であるが、これはいわばひとつの例であって、文化的目標が金銭的成功に限られねばならないというわけではない。しかしこのことを認めた上でも、デュルケムの人間的欲望と較べて、その範囲が著しく限定されたものであることは明らかであろう。

マートンは、デュルケムが人間的欲望として述べていたものの中から特定の欲望を抜き出し、それを文化的目標という形に定式化しなおしたと言うこともできる。そしてこのことはまたデュルケムのアノミー論において中心的位置を占めていた人間的欲望——それはかなり幅の広いものとして考えられていた——が、ある特定の欲望へと押し込まれることによつて、アノミー論の中から実質的に脱け落ちて行くことでもある。私はこのような欲望の脱落をもたらしたものを、次に述べるロングにならつて、〈アノミー論における社会化されすぎた人間観〉と呼びたいと思う。

II ここで少し、〈社会化されすぎた人間観〉に対するロング (1961) の批判を見ることにしよう。ロングは、現代社会学が、いかにして社会の秩序は可能であるかを問う社会学の原問

題を忘れ、人間をあまりにも社会化されすぎたものとして、そして社会をあまりにも統合されたものとして捉えているという点を批判している。彼は社会学の原問題として、何故「万人の万人に対する闘争」は終結するのか、何故社会秩序は可能なのかという「ホッブスの問題」を置いている。この「ホッブスの問題」には、人間性そのものの中に社会の秩序に対立する性質が内在することが想定されている。しかし、人間性そのものの中にそのような性質が存在しないと考えるなら、すなわち、規範や価値の内面化が何の葛藤や抵抗をも惹き起こすことなく行なわれ、役割期待がスムーズに遂行され、そして期待による補充がうまく機能すると考えるなら、そこにおいては、「ホッブスの問題」は解決されるのではなく、消え去ってしまう。このように、「ホッブスの問題」に対する答を見出そうとして、かつて現代社会学は、問題そのものを消し去ってしまったのである。このようにロングは主張している。

すべての人間は、たとえば言葉を話すというような人間的属性を持つに到るという意味においては社会化されるが、しかしだからといって、人間は自己の属する社会の特定の価値や規範によつて完全に形づくられるわけではない。しかし〈社会化されすぎた人間観〉においてはこの両者の区別が曖昧にされており、その結果、すべての人間が、社会的な規範や価値の内面化によつてのみ形づくられると考えられるに到った、とロングは批判している。さらに彼は、そこにおいては社会化の二つの意味が混同されているのみならず、規範や価値の内面化そのもの

が、過度に単純化されてしまっているとしている。すなわち、精神分析理論において超自我形成——それは当然、抑圧や内的葛藤を含んでいる——との関わりの中で語られていた「内面化」は、社会学者がその概念を採用してゆくうちに、「気づかれないうちに「学習」ないし最も単純な意味での「習慣形成」と同一視されるに到った」のである。そしてその結果、社会化に伴う葛藤や抑圧は、社会学者の視野から消え去ってしまった。社会学者は社会化の結果としての葛藤には目を向けるが、社会化の過程そのものに含まれている葛藤はそこでは無視されてしまっているのである。

III このような「社会化されすぎた人間観」に対する批判を頭にいれながらも一度アノミー論をふり返る時、デュルケムの「欲望の沸騰」という言葉の中に、少なくとも二つの問題が含まれていることを見出すことができるであろう。すなわち、ひとつは「欲望の沸騰」そのものに含まれている問題であり、もうひとつは沸騰した欲望が満たされないことから生じる問題である。⁽³⁾「社会化されすぎた人間観」との関係でいえば、前者は欲求の社会化そのものに伴う葛藤の問題であり、後者は社会化された欲求が満たされるかどうかという問題、すなわち社会化された結果としての葛藤の問題である。マートンは、(1)先に述べたように、デュルケムが人間の欲望として捉えていたものを文化的目標という形に置き換え、その範囲を著しく限定することによって、そして(2)強調された文化的目標が個人の内部に

何の葛藤も惹き起こすことなく内面化され、個人の目標となるということとを暗黙の前提としてしまっていることによって、すなわち、社会的な価値が内面化される際に伴われるかもしれない葛藤を無視することによって、デュルケムの「欲望の沸騰」という言葉の中に少なくともインプリシットな形においてはあれ含まれていた問題——先に述べた前者の意味での問題——を、見失ってしまった。すなわちマートンにおいては、文化的目標としてとりあげられているもの以外の「人間の欲望」が無視されているだけでなく、強調された文化的目標が個人の目標として内面化される際の内的な葛藤もまた無視されているのである。

IV 少なくともその心理的側面に関する限り今までの(主としてマートンの)アノミー論は、文化的目標(宮島(1970)の言葉を使えば「疎外された欲求」)が、制度的手段という(主として階級的な)障壁のゆえに達成できない時に生み出される欲求不満の問題にしていたのであるが、アノミー論が先に述べた社会化そのものに含まれる葛藤をも考慮にいれようとする場合には、それは、いわば強調された欲求の陰になって抑圧されている欲求の生み出す不満——それは無意識的な不満とでも呼ぶのが適切ではないかと思う——をも問題とすることが必要になってくるであろう。

今述べた無意識的な不満とは、ある強調された文化的目標が個人に内面化される際に生み出されるものであり、無意識的

な次元で抑圧されている欲求が生み出す不満——というよりは、欲求が抑圧されている状態と言った方がより適切であろう——である。それは、欲求が満たされないことによる不満——その場合には、その欲求は意識されているし、またそこで生ずる不満も意識されている——ではなく、欲求が抑圧される——それゆえ、その抑圧された欲求が意識されることはないし、またそこで不満(=抑圧された欲求の存在そのもの)も意識されない——ことによるものである。繰り返しになるが、今までのアノミー論が問題にしてきたのは、個々人に内面化されたものとしての「目標」と「手段」とのズレから生ずる不満——この場合には、満たされていない欲求の存在は意識されている——であるのに対して、ここで言う無意識的不満とは、特定の強調された目標が内面化される際に——すなわち、特定の欲求がかきたてられ、いわばその陰になっている欲求が抑圧される際に——生ずるものなのである。

この無意識的不満は、当然、通常は不満そのものとして意識されることはありえないが、しかし意識されなまま人々の意識や行動に多くの影響を及ぼすことは、十分に考えられる。

V この無意識的不満が通常は不満そのものとして意識されないということは、それが科学的な研究の対象となりえないということを意味してはいない。表面にあらわれている何らかの徴候から、それを推測することが可能だと思われるからである。この点に関して、次に、エチオーニ (1988B) が提唱している

〈個人的コスト〉の測定の問題に、少しばかり触れておきたいと思う。

エチオーニ (1988B) は、態度測定の結果からのみ情報を得ている限り、現在のアメリカ人の大多数は現在の生活に満足していることになるが、多少なりともより間接的な方法を使った調査の結果を見た場合には、態度測定の結果から見る限り満足していると考えられる人々の間にも、「疎外」——彼はこの言葉を、人間の基本的な諸欲求が満たされていない状態を指すものとして使っている——の徴候があらわれているという点を指摘し、通常の態度測定にそれらの徴候があらわれて来ないのは、それらが抑圧され、無意識化されているからだとしている。

彼は、基本的な諸欲求が満たされないまま表面的なレベルでの欲求が満たされている時、それを「虚偽的 (inauthentic)」な状態と呼び、そのような状態を維持するためには、社会的にも個人的にもコスト(すなわち犠牲ないし代価)が必要となってくるとしている。このうちの社会的コストは、また、社会化のコストと社会統制のコストとに分けられる。社会化のコストとは、ある人間をある役割に社会化するのに必要なコスト——すなわち、時間、資源、配慮、人力、等々——であり、社会統制のコストとは、ある役割についている人間を、その役割期待に応じせしめるために必要となるコストである。また個人的コストとは、社会化や社会統制がなされる際に個人に課せられるコストであり、フラストレーション、精神疾患、心身障害、心理的緊張といったものを含んでいる。この〈個人的コスト〉と

は、個人がある特定の社会ないし集団に適応するために、基本的な諸欲求を抑圧しなければならなくなった結果であり、社会そのものに含まれる抑圧の結果という意味で、先に述べた無意識的不满とほぼ一致していると考えることができる。彼は、このような個人的コストの測定は、社会的コストの測定に較べればかなり困難であるが、それでも、少数の主要な個人的コスト——たとえば精神疾患や心身障害の率など——を比較することによって可能となるであろうとしている。

VI 以上、次のようにまとめることができるであろう。今までの(主としてマートンの)アノミー論は(社会化されすぎた人間観)の上に成り立っているものであり、そこでは欲求の社会化そのものに伴う葛藤が無視されていた。そしてアノミー論がこの点をもその視野の内にとりいれようとするなら——そしてそのことは同時に、デュルケムのアノミー論に含まれていた豊さを取り戻すことにもなるのだが——社会化に対する抵抗を生み出すものとしての(欲望)ないし(欲求)という観点をアノミー論の中に回復することが必要となる。そしてその時アノミー論は、人々の間に植えつけられた欲求が「階級矛盾の存在によって屈折せしめられる」(宮島(1960))過程の解明と同時に、「欲求の疎外」の心理的帰結の二つの側面である意識的不满と無意識的不满、およびその両者の間の関連の解明をもめざすことになるであろう、と。

最後に、このような無意識的不满は、単に個人的なものであ

るといふより、むしろ社会的ないし集団的なものであると考えられるという点について述べておきたいと思う。すなわち、民族、社会、集団、階級、階層などが異なるに従って、そこで強調されている文化的目標が異っており、またそこでの社会化に伴う抑圧の形態も異っているので、その結果生ずる無意識的不满も、当然それに従って異ってくると考えられる。この点はまた、フロム(1963)のいう「社会的無意識」ともつながってくるが、ここではこの点については触れないことにする。

今後の課題としては、先に述べたような意味での意識的不满と無意識的不满との関連の解明ということになるが、そのためのまず手始めとして、幸福感や満足感・不満足といったもの——意識的不满——と、個人的コストとして測定されるもの——この指標として何をとるかにについては、まだはっきりした考えを持っていないが——とを、階級、階層、職業、あるいはその他のデモグラフィックな要因の中に位置づけながら、比較検討して行きたいと思っている。

また、このような方向での研究がアノミー論と呼ばれるべきかどうかは、いってみればどうでもよいことであるが、しかし少なくともそれを、今まで述べて来たように、従来のアノミー論において無視されて来た(欲望)ないし(欲求)という側面——それはデュルケムのアノミー理解においては中心的な位置を占めるものであった——を、アノミー論の中に再び取り戻す

ためのひとつの試みとして理解することは可能であろう。

(1) 今述べた二つの理論的立場は、必ずしも明確に分離しているわけではなく、相互に関連し合っている。デュルケムのエゴイズムとアノミーに関連しても、同じことが言える。すなわち、デュルケムは、エゴイズムとアノミーを完全に別のものとしてではなく、社会解体という同一の現象の二つの異った側面として捉えていた。

(2) たとえば動物は、満腹になればそれ以上食べようとはしない。「ところが、人間の場合にはそうはいかない。なぜなら、人間の欲求は、ほとんど肉体に従属していないし、あるいは少なくとも、動物と同じようには従属していないからである。」(宮島訳二〇三頁)このように、デュルケムにおける人間的欲求とは、単なる生理的な欲求ではなく、むしろ社会的な欲求として捉えられていた。この点を見逃すと、宮島(1970)が指摘しているように、個人の欲求と社会とを機械的に対立させる「きわめて戲画的構図」に陥る恐れがある。しかしこの点に注意すると同時に、それと全く逆の危険も存在していることを見逃してはならない。すなわち、逆の極端に走って、欲求についての「社会化されすぎた人間観」に陥る危険である。

(3) 彼の批判は、主としてパーソンズに向けられている。

(4) この二つの問題を、宮島(1970)は、今から述べるのと多少異った角度から、「二重の意味において疎外され

た欲求の問題」として捉えている。「すなわち、(1)内発的な欲求から切り離された他律性、(2)まったく充足し到達することのないたえざる欲求不満状態」、の二つがそれである。そこでいう「内発的な欲求から切り離された他律性」とは、欲求が「内発的な根拠を欠いており、「欲求の開発者」によって「上から誘発」されたものとして存在しているということである。本ノートは、このような「誘発され」外部から「植えつけられた」欲求のいわば陰の部分、すなわちその過程によって抑圧されるに到った欲求に目を向けることを目指すものである。

(5) たとえば性的な欲求が昇華されるといった場合を思い浮かべていただければ、この点の理解は容易になるだろう。性的な欲求が昇華されて、たとえば金銭や地位を求める欲求となったとしよう。その場合、昇華された欲求——金銭や地位を求める欲求——が満たされない時、そこに不満が生じるが、それは意識的な不満である。しかしこのような昇華された欲求が満たされており、意識的には満足している場合にも、性的な欲求そのものが満たされているわけではない。そこでは性的な欲求そのものは抑圧され無意識化されている。その抑圧された欲求の存在が、無意識的不満である。

(6) たとえばそれは、(文化的)目標(の内面化)そのものが生み出す不満であるため、目標そのものの置き換え(マトーンのいう「反抗」)の原動力となる可能性もある。

(7) シンニヤムス (1953) の「これら似た議論を行なっている。すなわち『あらゆる社会と制度は、その社会の構成員に、ある特定の情動に対する問題を課す』(総貫記九六頁)であり、『我々は、『特定の歴史的経験の結果として』どのような情動にならざる負担が大衆に課せられたらざるかを推定することはあるだろう』(同記一〇七頁)である。」

(8) フロイドの「社会的無意識」は、必ずしも私の考えを一致してゐない。

《中略論著目録》

Bendix, R. 1953. "Compliant Behavior and Individual Personality," *A. J. S.*, Vol. 58.

Bradburn, N. & Caplovitz, D. 1965. *Reports on Happiness: A Pilot Study of Behavior Related to Mental Health.*

Chinard, M. B. ed. 1964. *Anomie and Deviant Behavior: A Discussion and Critique.*

De Grazia, S. 1948. *The Political Community: A Study of Anomie.*

Durkheim, E. 1893. *De la Division du Travail Social.*

Durkheim, E. 1897. *Le Suicide: Etude de Sociologie.*

Etzioni, A. 1968 A. *The Active Society: A Theory of Societal and Political Processes.*

Etzioni, A. 1968 B. "Basic Human Needs, Alienation

and Inauthenticity," *A. S. R.*, Vol. 33.

Fromm, E. 1962. *Beyond the Chains of Illusion: My Encounter with Marx and Freud.*

Horton, J. 1964. "The Dehumanization of Anomie and Alienation: A Problem in the Ideology of Sociology," *The British Journal of Sociology*, Vol. 15.

Merton, R. K. 1949. *Social Theory and Social Structure.*

Merton, R. K. 1959. "Social Conformity, Deviation and Opportunity Structures: A Comment on the Contribution of Dubin and Cloward," *A. S. R.*, Vol. 24.

Parsons, T. 1962. "Individual Autonomy and Social Pressure: An Answer to Dennis H. Wrong," *Psychoanalysis and the Psychoanalytic Review*, Summer 1962.

Turk, H. 1965. "An Inquiry into the Undersocialized Conception of Man," *Social Forces*, Vol. 43.

Wrong, D. H. 1961. "The Over Socialized Conception of Man in Modern Sociology," *A. S. R.*, Vol. 26.

Wrong, D. H. 1963. "Human Nature and the Perspective of Sociology," *Social Research*, Vol. 30.

大井英昭 (1972) 「トクマナーマンマン」『社会学评论』八九。

折橋徹彦 (1971) 『状況の人間行動』。

佐田啓一 (1972) 『価値の社会学』。

佐々木嬉代三 (1970) 「アノミー論に関する批判的考察」
『ソシオロジ』一六一—二。

宮島喬 (1970) 「アノミー論への現代的視角——デュルケ
ーム理論と現代」『思想』五四七。

(一橋大学大学院博士課程)